

ものづくり地域交流活動について：
学生と地域がつながる試み

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今山, 延洋, 柴田, 祥吾, 柴田, 将志, 塚本, 穂高, 高瀬, 悠太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7162

ものづくり地域交流活動について

—学生と地域がつながる試み—

技術教育講座 今山延洋、柴田祥吾、柴田将志、塚本穂高、高瀬悠太

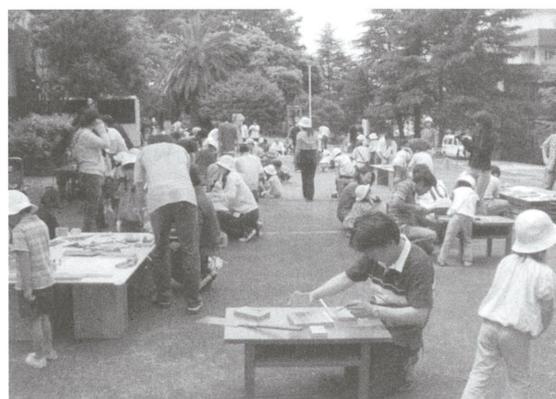
はじめに

いじめや不登校、引きこもり、家族関係、国際交流（異文化交流）、遊びの継承、地域文化の掘り起こし、生涯学習の推進などさまざまな課題が教育現場の内外にあふれている現状において、問題解決能力を持つ柔軟な人材が求められる。そうした人材育成のためのひとつとして、学生が大学の外へ出て活動することの意義が認められてきている。

本報告では、ものづくりによる、幼稚園での親と子の活動、公民館での活動、ストリートフェスティバルでの活動について報告する。

1. 附属幼稚園の親子で一枚ゲタ作り

静岡大学教育学部附属幼稚園（静岡市葵区大岩）の年長組の親子教室で親子による一枚下駄づくりを行った。平成19年は10月20日（土）に、午前中に運動会を行い、その午後に実施した。年長組園児45名とその保護者や家族、幼稚園実習生10名、年長組担当教諭が取り組み、TA（ティーチングアシスタント）として学部生・院生15名が支援した。



12:30頃から取り組み、13:30頃にはほぼ全員が完成し、年長組の園児達は、歯が一枚の下駄を履いて遊び回り、自宅に持ち帰った。

平成20年は、6月14日（土）に静岡大学教育学部の技術科木材加工実習室前において同様の内容が実施された。TA（ティーチングアシスタント）として学部生・院生13名が支援した。

園児が作る下駄は杉やヒノキを使った一本下駄で、加工過程には鋸や玄翁、ノミ、キリ、ボール盤などの道具を使用した。園児たちは、普段触れることのない道具に触れることで、それぞれの道具の役割や利用方法を知ったり、刃物などの危険さやそういった道具を扱う時の注意を体感していたように感じた。中には子どもと同じように道具の使い方をはじめて知っ



たというお母さんや、子どもよりも熱中してものづくりに取り組んでいるお父さんの姿も見られ、園児だけでなく、親御さんたちも楽しんで参加できる家族ぐるみのものづくり体験ができたと感じた。また、園児たちは下駄が完成するとさっそくそれを履き、自慢げに友達に見せたり、ポスターカラーなどで自分風に絵を描いたりと大切にそれらを扱っていた。既製品が多くある中で、園児たちは自らの手でものを作れることの重要性を理解したのではないかと思う。

実施後の感想の中にTA（ティーチングアシスタント）に関するものが多く、

- ・スタッフの方が親切に教えていただきました。できてほっとしています。ありがとうございました。
 - ・子供の練習する姿を見ていると、自分の子供の頃を思い出しました。スタッフの方が親身になって教えてくれたので、嬉しかった。
 - ・子供になるだけ道具を使用するのを手伝わせてやりました。スタッフ（ゆきさん）がよく気遣いしてくれました。優しいスタッフでした。
 - ・不慣れな人でも自分の手で作業ができるよう、始まりだけを手助けする対応に満足です。いつの間にか熱中してしまいました。楽しかったです。見栄えはイマイチでも手作りですから・・・そこが良いところですね！！とても親切に指導していただきました。ありがとうございました。
 - ・歯を入れる溝をノミで削る所がすごく難しく平らにすることの大変さを感じました。学生さんの教え方が良くて立派な一本ゲタができました。ありがとうございました。
 - ・最初は親が一生懸命になっていましたが、スタッフの方に協力していただいたおかげで、後半は子供中心で作業を進めることができました。できあがったゲタも最初は戸惑っていましたが、慣れてくるにつれ目がイキイキとした感じになり、親として嬉しく思いました。「オクさん」ありがとうございました。あなたのおかげです！！
 - ・大学のお兄さん・お姉さん方に大変優しく対応していただきました。
- など、TAはやりがいを感じたと思われる。



2. 公民館でのものづくり

静岡県富士市の富士北まちづくりセンターにおいて、平成19年11月11日と平成20年11月9日に、新富士ロータリークラブ主催のサイエンスプロジェクトの一環として参加し、平成19年は「音の出る鉛筆立て」、平成20年は六連発ゴム銃の製作を行った。作業台は6台、TA（ティーチングアシスタント）は5名で行った。

平成19年は音の出る鉛筆立て「カラコロ」作り、平成20年は「六連発ゴム銃」作りを行った。いずれも大盛況であり、私たちスタッフは、昼食をとる時間もろくにないほど、

子どもたちには注目の的であったようだ。子ども達に、製作指導を行っている、ねじ回しの使い方が分からない子どもが多数いるのに驚いた。話を聞くと、小学校6年生になってもカッターをはじめとする刃物を触ったことがないという。近年の保護者は、過保護になりすぎて、子どもをものを作るという行為から無意識のうちに遠ざけている。手先を使い、頭をひねりながら試行錯誤することの喜びを知らぬまま、大人になる子どもも大勢いるであろう。いまだに、日本を支えているものづくりである。そんな大人が社会にあふれ出ると思うと、胸が苦しくなる。改めて、今回のイベントのような、ものづくり体験の大切さを感じた。



3. ストリートフェスティバル

2008年11月23日(日)に静岡の街中にある青葉シンボルロードにて、アートとミュージックの祭典であるストリートフェスティバルに初めて参加した。ストリートフェスティバルとは、アートとミュージックが美術館やコンサートホールからストリートに出て、いろいろな人に触れてもらうというフェスティバルである。そのストリートフェスティバルのなかで、「ものづくり体験」のブースとして、主催者側から誘いを受けて、私たちは出展することができた。本来ならお金を払ってブースを借りて行なうところを、イベントの中心部分にテントを出していただき、他のブースより2倍ほど広いスペースで「ものづくり体験」を行なうことができた。

「ものづくり体験」の種類として、子どもたちが興味を持ちそうなものを私たちは選んだ。ゴムが連発して発射することができる「6連発ゴム銃」や、鉛筆たての中にビー球を入れることによって音が鳴る「メロディアス・ペンスタンド」を体験できるようにした。私たちスタッフが少し手伝いながら作るというコーナーになった。

今まで、私たちは公民館でものづくり体験教室をしてきたが、そこでの参加者と今回の街中の道端で行なうものづくり体験の参加者は少し違っていたように感じた。今まで行なってきた公民館での参加者は、学校で配られたチラシを元に情報をキャッチし、自らの希望で応募し参加するという「今までものを作ったことがあるし、今回もつくりたい」という子どもが多く集まっていたのに対して、今回は道端で「なにやらおもしろそうだ」、「あれを作りたい」と実演に引かれてくる子どもがとても多かったように感じた。学校でチラシを見ても反応しないような子でさえも、目の前にあってゴムが連射で飛んでいく様子や、「カラコロ」と木がきれいに奏でる音を聞いて自分も作ろうと決めたように思えた。その実演に引かれて、「あれをつくりたいな」という感覚を引き出し、それを形にしていくことができるのは、道端で行なうことのできるストリートフェスティバルならではないかと感

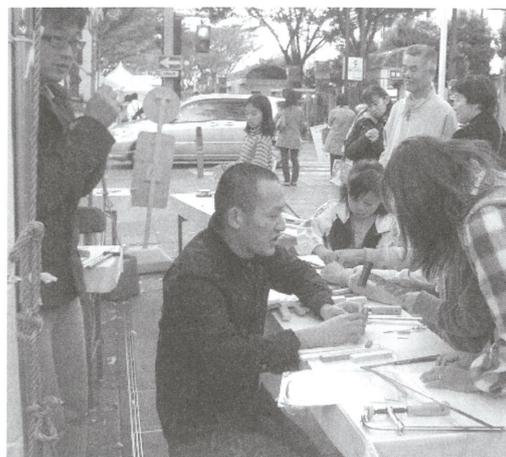
じた。

そして、一緒にものづくりの手伝いをしていて感じたことが、ノコギリやかなづちに触れることに憧れる子どもが多いように感じた。参加してくれた子どもたちの日常の中にそういった工具が身近に存在していないのか、工具を持ったらあまり手を借りずに自分でやりたがる子どもが多かった。親も、ブースに子どもを預け、自分は他の場所で楽しんでいるという光景も見受けられた。子どもたちもそういった環境であったから、時間を気にせずのびのびとつくっていた。

道端で行なっているから、いろいろな人が立ち止まり、子どもたちが楽しそうにものを作っている様子を見ていた。そのなかで、「うちの幼稚園でも出張に来て、こういった教室をやってほしい」と言ってくださったり、「今日は来ていなくて残念なのだが、うちの子どもにもぜひ作らせたいから、説明書と材料を売ってくれ」と言ってくださったりした。街中でいろいろな人にもものを作っている姿を見てもらえているとこういったこともあるのかと感じた。

このものづくり体験はとても好評で、ブースを空けた 11 時頃から街中のイルミネーションが光りだした 18 時頃まで途絶えることなしに参加した子供たちで行列ができていた。私たちスタッフ側としては、とても忙しく休憩さえもない状態だったが、いろいろなひとが興味をもって来て立ち止まって見てくれたり、子どもたちが楽しそうに作っている様子だったり、嬉しそうに持って帰っていくといった様子がエネルギーとなってとても新鮮だし、知らない間に自分たちも夢中になっていた。

子どもたちにもものづくりの機会をする場合は、事前に募集して公民館のように 1 つの施設で行なということも大切だが、道端でアピールしながら呼び込んでいくということも大切なのではないかと感じた。



4. おわりに

ものづくりの「技」を通して、家族関係、異年齢交流、遊びの継承、地域文化の掘り起こし、更には、国際交流（異文化交流）、生涯学習の推進、あるいは、いじめや不登校、引きこもりなどへの一助などさまざまな効果が見出されている。教育現場の多様な課題に対応出来る素養の目を学生時代から身につけることは非常に有意義なことと思われる。そうした人材育成のためのひとつのとして、幼稚園での親と子の活動、公民館での活動、ストリートフェスティバルへの参加は、学生が大学の外へ出て活動することの意義が認められた。